
< 未来 + 異世界 + 俺 = 結婚アナザーストーリー > ミクと俺の黙示録

泡 照名

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

< 未来 + 異世界 + 俺 // 結婚アナザーストーリー > ミクと俺の黙示録

【Nコード】

N2609BA

【作者名】

泡 照名

【あらすじ】

『未来 + 異世界 + 俺 // 結婚』のアナザーストーリー、その1
ミク編

俺とミクの物語（前書き）

未来＋異世界＋俺⇨結婚を読んでからこれを読む方、先にこれを読んで、未来＋異世界＋俺⇨結婚を読む方、どちらから見てもらってもかまいません。

両方読んでもらえると、話が分かりやすいと思います。

俺とミクの物語

春には桜が咲き誇り、雨のように花びらが舞うこの通りは、”桜通り”と呼ばれている。

俺は 倉肩信次はこの通りが好きだ。

今は秋だけど、季節なんて関係なく、この通りが好きだ。

何故なら、あいつに初めて会った通りなのだから。

俺は、気分を弾ませながら、通学路を歩いていた。

何せ、今日は始業式、高校生活最後の年の幕開けに新しい教師に新しいクラスメイト。

そう、クラス替えの季節がやってきたのだ。

軽い足取りを運び、俺は校門についた。

校門の前には、桜が咲いている。

その所為か、この通りは”桜通り”と呼ばれている。

校門には人だかりができていて、何だ何だ、と背伸びをして覗いて見ると、クラス分けの票が、でかでかと貼られていた。

だが、人だかりが多すぎて見えない。

「信次、お前は五組だったぞ」

肩をたたかれたので、振り返ってみると、俺の知っている顔が三つ並んでいた。

まず、俺の肩を叩いたり、声を掛けてきたであろう人物が、越後波雪。

イケメンで高身長、更に勉強も出来るのに、恋に興味の無い宝の持ち腐れな俺の幼馴染。

そしてその後ろにいる白い帽子をかぶっている女の子は、美間坂あげは。波雪と同じく、俺の幼馴染。

ミスティアスで、おとなしそうなところが、一部の男子にはドストライクだそうだ。

そしてその後ろで、陽気に微笑んでいるのは小奢一閃。何にも考えてなさそうに見えるが、実際、何も考えていない。何か考えたとしてもそれは女の子のことばかり。こいつも一応、俺の幼馴染。

「運の良いことに、俺たち全員が五組だったぜ」
本当に運のいいことだ。

うちの学校は一学年に八クラスあるが、その中で、四人が同じクラスになれたことを運が良かったと言わないで何と言おうものか。そして

「あと、一人、転校生が入ってくるらしいんだけど、そいつも同じクラスらしい」

「噂によればかわいい女の子らしいよ」
そうか、と頷く。

そして、俺の横を通った人を、俺は二度見してしまった。

「もしかして あの子か？」

俺は、俺の横を通り過ぎて行った人を、指差した。

「さあ？」

波雪は首をかしげた。

「とりあえず、教室に行こ……。信次……」

俺はあげはに裾をひかれ、引っ張られるがままに駆けた。

俺の席は窓側の後ろから二番目で、あの桜通りがよく見える。前には、波雪が座っているの、新学期早々、いい席だな、と心の中です。

桜通りを、ポー、と眺めていると波雪が声を掛けてきた。

「ほら、転校生の紹介があるぞ」

波雪に言われ、さつき波雪が言っていたやつか、と思り返す。

「じゃ、木ノ原（きののはら）、入って来い」

教室のドアを開け、入ってきたのは、桜通りで俺の横を通り過ぎた女の子だった。

「木ノ原ミクです。宜しくお願いします」

転校生の方を見ると、一瞬、その青い双眸（そくめい）と目が合ってしまった。

だが、その目からは、感情が感じられなかった。

「じゃあ、木ノ原はそうだな……。倉肩の後ろの机に座ってくれ」「はい」

木ノ原は二つ返事をする後ろに纏めた茶髪を振りながら、俺の後ろの席へ向かった。

そして、木ノ原が着席したのを確認して、俺は後ろを向いた。

理由は二つ。一つは後ろの席の奴と仲が悪いのは嫌だったから。

そしてもう一つ理由は 俺があの時、二度見してしまった理由でもある、この美少女に近づいておきたかったからだ。

「よろしく。えっと、木ノ原さんだけ？」

「よろしく。で、あなたは誰？」

「俺は、倉肩信次って名前だ。覚えておいてくれたらありがたい」

「そう、よろしく」

話が終わったので、俺が前を向いて、波雪に話しかけようとした、その時

「で、話はそれだけかしら？」

「あ？あ、ああ、まあそうです」

「それだけの為にあたしの時間を割いたって言うの？」

「へ？」

これが、俺と、ミクの物語の始まりだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2609ba/>

<未来+異世界+俺=結婚アナザーストーリー> ミクと俺の黙示録

2012年1月6日21時31分発行